

今、なぜ幼保小中一貫教育なのか

正直者、一生懸命努力する子どもが生きる学校にしたい。



どの学校、学級にも、授業についていけないにもかかわらず、黙って席に座り、まじめに授業に臨んでいる子どもがいます。この子どもは、これまでのどこかでつまずき、それでもまじめに一生懸命努力を続け、今日まで至っているのです。中学生になってから、これまでの積み残しを取り戻そうといくらがんばっても、なかなか成果は見られません。

阿久比町では、このような正直に一生懸命努力しているにもかかわらず報われない子どもに、真正面からかかわっていきたいと考え、幼保小中一貫教育を立ち上げることとしました。「木の芽が伸びるのは柔らかいから、つぼみが開くのも柔らかいから」と相田みつを氏が言っているように、柔軟な子どものために、自立への基礎を築く時期である0歳～15歳の時期を大切にしたいと考えました。

それぞれの段階で、本当に責任を果たしているかを見極めなければ…。

子どもの成長は、「オギャー」と産声をあげた瞬間から始まります。その時から、周りの大人は、その子どもの成長に対して、責任を果たしていく必要があります。幼稚園や保育園に入園するまでの家庭の責任、幼保小中でかかわる教員や保育者の責任、それぞれの立場や段階でその責任は違います。その時期に身に付けるべきことが確実に身に付いているかどうかを見極める必要があります。

例えば、小学校2年生で、その学年で身に付けさせるべき学力、体力、道徳性、そして学習習慣や生活習慣をきちんと身に付けさせて、3年生に送り出しているか。それが教育であると考えます。

そこで、阿久比町幼保小中一貫教育では、各年齢に応じた「欠落なき教育」の実現をめざすこととしました。



幼保、小、中に見えない壁がある。これを打ち破らなければ…。



幼稚園や保育園，小学校，中学校を単独に見れば，確かにそれぞれがしっかりと子どもの成長を考えた指導をしています。しかし，幼稚園から中学校の12年間（保育園からは15年間）を通して見た時，おかしいと思うことはありませんか。

例えば，3月まで年長児として，給食の準備等できることは自分たちでやり，また年下の園児の面倒を見ていた子どもが，4月に小学校へ入学すると，すべて上級生にやってもらう場面を目にします。幼稚園や保育園でできていたことに，さらに積み上げるという発想が薄いようです。

子どもは，年齢が上がるにつれて判断力が高まります。しかし，学校でのきまり・規則は，小学校で緩く，中学校で厳しいのが一般的です。逆ではないでしょうか。

阿久比町幼保小中一貫教育では，幼稚園や保育園，小学校，中学校の間のずれや逆転のない「段差なき教育」を進めたいと考えました。

1町1中学校という利点を生かしたい。



阿久比町には中学校が1校しかありません。つまり，阿久比町に住む子どもたちのほとんどが，阿久比中学校で学ぶのです。町内4小学校では，それぞれが地域の特色を生かした教育を進めています。しかし，中学1年生のスタート時点で，子どもの力がまちまちでは，中学校での指導の効果を上げることはできません。それは，小学校の指導を画一的にすることではありません。それぞれの特色を生かしつつも，最低限身に付けさせるべきことは，しっかり身に付けさせることです。これは，幼稚園や保育園でも同じことが言えます。もちろん家庭教育も同様です。

そこで阿久比町幼保小中一貫教育では，幼稚園や保育園間，小学校間，さらに学級間で「落差なき教育」が進められることが大切であると考えました。

幼保小中一貫教育プロジェクトとは

幼保小中一貫教育を実行するためのプロジェクトを立ち上げよう。



阿久比町が思い描いた0歳～15歳までの一貫性のある教育を実現するためには、子どもにかかわるすべての大人が、共通の目的意識をもつ必要があります。そして、これまでの枠にとらわれず、子どもの成長過程を中心に指導を見直す必要があります。

しかし、言葉をいくら並べても、実行に移さなければ「絵に描いた餅」です。そこで、平成17年度より阿久比町幼保小中一貫教育プロジェクトを立ち上げました。そして、このプロジェクトを進める推進会議(園長・校長・教頭等21名)で方向性を確認し、全体会議(幼稚園や保育園, 小学校, 中学校の職員代表105名)で共通理解を図りました。発足当初は、実態調査を通して阿久比町の教育や子育ての問題点, 一貫教育の意図や意義, 具体的な方法を一人一人が自覚することを大切にしました。そして、何よりも「新しいことを始めるのではない。昔から大切にしてきたことを再確認し, 実行するのだ。」と確認しました。

このプロジェクトは、子どもや教員・保育者だけが対象ではない。

子育ては、幼稚園や保育園, 小学校, 中学校だけで行われるものではありません。家庭や地域と協働して, 初めて実現します。そこで, プロジェクトのメンバーとして, 保護者はもちろん, 地域代表, 行政(住民福祉課・産業課・学校教育課), 保健センターの保健師, 子育て支援センターの所長等様々な立場の方が参画しています。

また, 11月2日を「あぐい教育の日」と制定し, 町民あげて子育てを考える機会としています。この日の前後で, 町内全園全校が保育や授業を公開し, その後子育てや教育に関連した講演会やシンポジウムを行っています。

園・学校, 家庭, 地域が, それぞれの役割を自覚し, 責任を果たすことで効率的・効果的な教育が実現するのです。



義務教育の出口である15歳の生徒像を明確にもつことが大切である。



プロジェクトでは、幼保小中一貫教育の目標を共有することが大切であると考えました。そこで、まず義務教育の出口である15歳のあるべき生徒像を描くことから始めました。

＜めざす生徒像＞阿久比町の15歳のすべての生徒に求める姿

○自らを律し、自ら実践していく生徒

○「生きる力」を身に付けた生徒

※生きる力とは：社会で役立つ学力

社会で生きていく上で必要な人間性

社会で生きていく上で必要な健康と体力

そして、この最終目標である生徒像に至るまでの各段階・学年での姿を設定したり、阿久比町の子どもの実態を把握したりしてきました。具体的な目標、具体的な実態をもとに、具体的な手立てや取組があって、初めて理想を現実に変えることができると考えました。

調和のとれた子どもの育成のために、5つの視点で具体的に考えると…。

一貫教育でめざす子どもとは、いわゆる知・徳・体がバランスよく成長し、調和のとれた子どもであり、学習指導要領がめざすものと何ら変わるものではありません。しかし、0歳からの15年間というスパンで、知・徳・体の基盤となる基本的な生活習慣や、食育等の今日的な課題を含めると、一貫教育の取組は多岐にわたることとなります。そこで、下のような5つの部会を設け、それぞれの視点で目標を設定し、実態を把握し、具体的な手立てや取組を提言としてまとめ、その分野をリードしていくこととしました。



○**幼児教育研究部**：就学までの6年間＋小学校との接続を中心に

○**生活習慣・学習習慣・食育研究部**：基本的な生活習慣を中心に

○**教科研究部**：学習指導要領に示された内容の重点化、焦点化を中心に

○**道徳・健康教育研究部**：心と体の健康を中心に

○**総合的な学習研究部**：自分の生き方を考える内容を中心に

幼保小中一貫教育を具体的に進める

幼保小中の連携、それは大人(保育者・教員)の意識改革です。



小学校の教員の「あんなにいい子だったのに、中学校では何をやっているんだ」とか、中学校の教員の「小学校でもっとしっかりしてくれたら…」という言葉を目にすることがあります。これは、幼稚園・保育園と小学校、園・学校と家庭の間にも同じようなことが起こっているのではないのでしょうか。しかし、保育者、教員、保護者の誰一人として手を抜いているわけではありません。逆に、みんな一生懸命に子どもにかかわっている場合が多いのです。

それでは、なぜこんなことが起こるのでしょうか。原因は、お互いの文化の違い、その違いへの理解不足なのです。小学校の教員がどれだけ中学校での学習内容や指導方法の違いを意識しているのでしょうか。中学校の教員が小学校で身に付けたことを生かした学習を組んでいるのでしょうか。幼保小中の連携は、まずお互いを知ることから始まるのです。

そこで、これまで行われてきた幼小連絡会や保小連絡会、小中連絡会に加えて、学校訪問等を利用した相互の授業参観、前年度卒園させた年長児担当の保育者が小学校1年生の指導を体験する「小学校体験研修」、小中学校の教員が夏休みに保育園での指導を体験する「保育園体験研修」等、様々な機会をとらえて、相互の交流と共通理解を図る取組を始めました。そして、中学校の教員が小学生に専門教科の指導を行う出前授業や教員向けの出前講座を行ったり、小学校と中学校間、幼稚園と保育園の間で人事交流を進めたりすることを通して、大人の意識改革を図ってきました。

また、小学校・中学校と幼稚園・保育園の子どもの交流を進める「交流カリキュラム」や、幼稚園・保育園から小学校へのスムーズな接続を考え、自由遊びを多く取り入れた「入門期カリキュラム」を作成し、子どもの活動という視点での交流や連携も進めています。

連携から一貫へ。0歳～15歳を見通した一貫性のあるカリキュラム作りを。

幼保小中の連携とともに、一貫性のある教育を実現するために、15歳までを見通して、それぞれの発達段階における身に付けさせるべき内容を明らかにしました。この内容は、欲張らずに最低限のものに絞りました。そして、それぞれの段階で、確実に身に付けさせ、責任をもって次の段階へ送り出すことを確認しました。



平成19年度に提案，作成された内容，資料を紹介します。

＜幼児教育部＞

子育て10か条，阿久比町めざす子ども像

＜生活習慣・学習習慣・食育研究部＞

家庭，園・学校がともに育ち合うための手引き

＜教科研究部＞

国語科コミュニケーション能力（「話す」「聞く」）重点指導事項一覧表，算数・数学科重点指導事項一覧表，園生活における国語や算数にかかわる活動一覧表

＜道徳・健康教育研究部＞

道徳性の発達段階と重点内容項目，推薦道徳資料，性教育カリキュラム，喫煙・飲酒・薬物乱用防止指導計画案，体力づくりカード

＜総合的な学習研究部＞

「総合的な学習の時間」のスキル一覧表，コンピュータ操作技能段階到達表，小学校統一単元，キャリア教育系統表，小学校英語活動指導内容一覧表

「阿久比町めざす子ども像」「家庭，園・学校がともに育ち合うための手引き」には，それぞれの年齢で「めざす子どもの姿」と合わせて，「園からの働きかけ」「学校からの働きかけ」と「保護者からの働きかけ」を分けて示し，それぞれの役割を明確にしたいと考えました。

また，親子ふれあい読書キャンペーン（幼児教育部），幼保小中高一斉あいさつ運動（生活習慣・学習習慣・食育研究部）は，家庭や地域を巻き込んだ取組となっています。

幼保小中一貫教育は阿久比の未来

「実践あるのみ」 絶えず改善を図り、生きた一貫教育をめざして。



阿久比町幼保小中一貫教育プロジェクトでは、様々な施策を打ち出し、パンフレットや冊子を作成し、共通理解や啓発を図ってきました。しかし、これらはどのように活用しているのでしょうか。「子育て10か条」は各家庭にしっかりと根付いているのでしょうか。「家庭、園・学校がともに育ち合う手引き」の「学校からの働きかけ」は、しっかりと行われているのでしょうか。一貫性のあるカリキュラムを作成した後、いかに実践をしていくかが大切であると考えます。

幼保小中一貫教育の成功は、子どもにかかわるすべての大人が主体的な実践者として取り組み、絶えず改善を図ることにかかっています。未来を託す子どものために、本気で子育て、人育て、教育に邁進することが、今の我々には求められているのです。「実践あるのみ」です。

縦糸と横糸が機能することで、阿久比の未来は素敵に織り上がります。

阿久比町幼保小中一貫教育がめざす生徒像は、子どもにとってのゴールではありません。むしろ人生という航海の中で、荒海に漕ぎ出すスタートとなります。

子どもが生涯にわたって学び続けられるように積極的に支援していくのが、幼保小中一貫教育であると考えます。幼稚園・保育園、小学校、中学校という縦糸と、園・学校、家庭・地域、行政という横糸がしっかり組み合わさって、生涯学習の基礎・基本をはぐくむ子どもの時期を育てていくのです。そして、子どもの未来、阿久比の未来が、素敵に織り上げられていくのです。

